

赤ひげ大賞

地域の健康支える情熱

地域で献身的な医療に取り組む医師を顕彰する第8回「日本医師会 赤ひげ大賞」（主催・日本医師会、産経新聞社、特別協賛・太陽生命保険）の大賞5人と今回新設された功労賞18人の受賞者が決まった。大賞を受賞した全国各地で活躍する医師5人の日々の活動と功労賞受賞者を紹介する。



担当する老人ホームの患者の健康状態を診察する木澤健一医師
—岩手県宮古市（早坂洋祐撮影）

木澤健一氏（岩手県宮古市）
本州最東端に位置する岩手県宮古市の中心部から南に車で15分あり、宮古湾にそそぐ津軽石川流域にある2階建ての医療センターが震ったのは東日本大震災の激しい揺れから40分後だった。1階の診療室と自宅の天井まで浸水、内部はめちゃめちゃになった。
未体験の激しく長い揺れに「これはとんでもないことが起きる」と直感。病院にいた十数人の患者を看護師と職員の手で分乗させ、「お前たちも帰るなさい」と送り出した。ところが、気が付くと病院の周りに黒い水の塊が押し寄せ、水深は50センチに達し、自らの避難は断念せざるを得なかった。
「2階で入院用のベッドを積み重ねた上で、妻とこれで駄目なら仕方ないと覚悟を固めた」と、当時を振り返る。九死に一生を得ると、すぐさま病院の復旧作業を始めた。患者は7割が薬が欠かさない地域の約半年寄り。「せめて薬だけでも出してやろう」と、懸命の作業で震災から4日目に2階で診療を再開した。

「苦難乗り越える覚悟」で尽くす

これが20日間も続いた。「津波につかたカルテを洗濯ばさみに挟んで所狭しと干していたのを今もよく覚えています」。当時の様子をこう語るのは過労から40度近い高熱を発し、駆け込んだ2階で点滴を受けた近所の主婦（63）。
地域でただ一人の医師は80歳を超えても電話一本で気軽に往診してくれた。地元小中学校の学校医は今も現役。住民の信頼は厚く、地元の町内会組織、本町協会の若狭会長（81）も「地域にとってかけがえのない先生」と話す。
人生の道しるべになったのは商才にたけ、東京・銀座で高級呉服店も経営した父親の言葉だった。「俺は自分のためになるものうけをした。お前は官能に金もか医者に金もか、人のためになることをやれ。東京ではなく地方の学校へ行け」
三陸沿岸の医療資源の乏しさに「若手のためについで」と決意して半世紀あまり、「医者」の基本は相手の心情を思いやること。苦難を乗り越える覚悟がないといけない。震災はそれが間違いないことを確認させてくれた。生涯現役を貫く決意を新たにす。（石田征広）

第8回 赤ひげ大賞（5人、順列は北から）

- | | | |
|-------|-------|--------------------|
| 木澤 健一 | 岩手 馬 | 木沢医院院長 |
| 内田 好司 | 群馬 馬 | 内田病院顧問 |
| 湯川 喜美 | 鳥取 取 | 湯川医院院長 |
| あき 龍三 | 広島 島 | ときや内科理事長 |
| 古江 増蔵 | 鹿児島 島 | 医療法人・社会福祉法人 桃蹊会理事長 |



日本医師会 横倉義武会長
おいては、いかに健康な状態を維持するかが大きな課題である

全国の各地域で、日々地道に医療に取り組む医師の活動に光を当てたいの思いから創設した「日本医師会 赤ひげ大賞」も、今年で8回目を迎えることができました。
今回の受賞者には、90代の現役の先生が4人もおられ、その功績には頭が下がる思いです。

生活密着 理想のかかりつけ医

り、医療も適切な姿勢を遂げていかなければなりません。これまでの医療は、診断や治療に重点が置かれてきましたが、今後は予防や教育、再発重症化予防、看取りなど、地域に密着した働きが重要となります。
それを実践していくのが「かかりつけ医」であり、情熱を持って地域に密着した医療活動を実践する受賞者の皆さんは、まさにかかりつけ医の理想の姿です。
本賞で顕彰されるのは各地で尽力する医師の一握りにすぎませんが、一人でも多くの皆さんに、このようなかかりつけ医をもちたいの思いを強くしていただければ幸いです。



太陽生命保険 副島直樹社長
赤ひげ大賞」を受賞された方々の皆さま、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆さま、誠にありがとうございます。毎年さまざまな苦勞を積み重ねて地域に根差している素晴らしい先生方の姿に、本当に頭の下がる思いです。当社は平成29年から「日本医師会 赤ひげ大賞」に協賛させていただいておりますが、地域医療に引き続き、ひたむきに尽力されてきた素晴らしい先生方の姿勢に毎年感銘を受けております。

地域医療の充実・理解促進を

実施した「健康や医療・介護に関するアンケート調査」の結果を日本医師会総合政策研究機構さまが分析したところ、かかりつけ医の存在が、地域の方々に検診・人間ドックの受診などの予防活動を促したり、幸福の実感や「コミュニティ」への参加、将来の健康問題への不安の解消など、ポジティブな影響を及ぼしたりすることが分りました。地域におけるかかりつけ医の存在は、なくてはならないものとなっています。
地域住民の健康な暮らしを支える先生方を顕彰する「日本医師会 赤ひげ大賞」をより多くの方々に知っていただき、地域医療の充実や理解促進につながることを願い、これからも継続して支援してまいります。

28日 BSフジで特別番組を放送

「密着！ かかりつけ医たちの奮闘～第8回赤ひげ大賞受賞者～」
2020年3月28日（土）12：00～12：55放送

【主催】日本医師会、産経新聞社
【後援】厚生労働省、フジテレビ、BSフジ
【特別協賛】太陽生命保険株式会社

内田好司氏（群馬県沼田市）
病院スタッフや患者らからは親しみを込めて「大先生」と呼ばれる。毎日、4、5時のウォーキングは欠かさず、週1回は外来診療。必要があれば手術も行う。実にエネルギーに富んだ日々を送っている。
受賞に際して大先生は「高齢者の医療・介護に関心をもってやってきました。評価されたのだ」と語り、病院の前身である内田外科医院時代に思いをはせた。
同医院は19床の有床診療所。高齢化が進むにつれ、おむつを必要とする入院患者が出るようになった。でも当時はおむつと対応は看護師の仕事にあらずという考えが強く、おむつを必要とする患者の入院は拒否されてしまう。医療の措置は不要なのに、排泄介護が必要な高齢者が別の医療機関に入院する社会的入院のケースが増えつつあった。
「病院と家庭の受け皿となる施設が絶対に必要」と焦燥感を募らせていたときに飛び込んできたのが、国の中間施設「病院と家庭の間の施設」建設構想だ

患者と誠心誠意つき合い半世紀

「「さっそく厚生省（現厚生労働省）に行き、担当課長と交渉するうちに200～250床との感触を得た」。時を置かず病院部門50床、中間施設200床規模の病院建築に取り掛かったが、県の対応で内田病院は病院99床・介護老人保健施設50床でのスタートを余儀なくされた。
それでも、病院と老健が同一建物内にあるという画期的でシームレスな医療介護連携の先取りだった。
「スケールメリットの面からは経営は非常に苦しかった。平成4年に認知症専門棟が認可され、ようやく軌道に乗った」と当時を振り返る。
14年には患者の拘束ゼロを宣言、「縛らない看護」を実践している。28年からは県警察医も務める。
地域医療に貢献して半世紀を超えた。「医者は患者さんに対して、誠心誠意つき合う職種」と考え、「年齢を重ねるにしたがって、患者さんと気さくに話をするよう心がけている」という。そして、「健康なうちは患者さんに向かい合い続けたい」といふ歯をみせた。（椎名高志）

■推薦方法と推薦基準

【推薦方法】本賞受賞にふさわしいと思われる方1人を各都道府県医師会会長が推薦

【推薦基準】病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員および都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）

「日本医師会 赤ひげ大賞」日本医師会と産経新聞社が共催し、都道府県医師会から推薦された候補者から、地域に密着して人々の健康を支えている医師、毎年1回、選考会を経て選定し表彰する。なお、13日に予定されていた表彰式は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため延期となった。



人生100歳時代を、ずっと元気に生きていくため。保険にはもってこいできることがあると、太陽生命は考えます。
たとえば認知症保険も、治療だけでなく予防のためにも使えるよう進化します。太陽生命の「ひまわり認知症予防保険」なら、加入1年後から2年ごとに予防給付金が受け取れるので、軽度認知障害発症リスクの検査や様々な認知症予防のために活用できます。変化し続ける時代のニーズに、太陽生命は保険でお応えしていきます。

業界初 ひまわり認知症 予防 保険

※当広告では選択緩和型認知症診断保険に生存給付金特別を付加したプランを「ひまわり認知症予防保険」としてご案内しています。状態継続日数の要件がなく、所定の認知症と診断された時に保険金を主契約でお支払いする生命保険は業界初です。（2018年7月現在、当社調べ）

【資料のご請求・お問い合わせは】太陽生命お客様サービスセンター **0120-04-22-33**（通話無料） 営業時間：月～金 9時～18時/土・日 9時～17時 ※祝日・年末年始（12/30～1/4）は休業します

https://www.taiyo-seimei.co.jp/

さあ、保険の新たな元へ。

太陽生命

検索

T&D 保険グループ

第8回 日本医師会

赤ひげ賞

赤ひげ功労賞受賞者 (18人)

- 増子 詠一 (北海道) 増毛町立市街診療所所長
- 坂井 武昭 (宮城) 坂井内科胃腸科理事・院長
- 小林 達 (山形) 朝日町立病院院長
- 赤松 郁夫 (栃木) 足尾双愛病院院長
- 山田 立雄 (千葉) 鉾南やまだ内科院長
- 前田 立雄 (東京) 前田医院院長
- 天野 隆三 (山梨) 天野医院院長
- 櫻田 修 (静岡) 江間クリニック院長
- 山口 勇 (愛知) 山口病院理事長
- 駒田 敏之 (三重) 駒田医院院長
- 川村 治雄 (京都) 渡辺西賀茂診療所
- 辰見 宣夫 (大阪) 辰見医院院長
- 北浦 信子 (奈良) 北浦医院東生駒診療所理事長・院長
- 横矢 行弘 (和歌山) 横矢クリニック院長
- 笠松 由華 (徳島) かさまつ在宅クリニック小児在宅医
- 大森 茂 (香川) 大森外科医院理事長・院長
- 橋本 信男 (福岡) 大山小児科医院院長
- 中村 義清 (沖縄) 中村内科クリニック院長

選考委員コメント

羽田信吾委員 今年には特に女性医師、高齢の医師が多かった印象だ。地域で長く医療に従事してきたという裏には、地域住民からの信頼があったはず。悩ましい選考だったが、赤ひげ先生の功績を顕彰することで、後に続く志のある若い医師が奮起する契機にしてほしい。

向井千秋委員 地域との密着性や医師としての継続年数、女性活躍などを考慮した。現代の赤ひげ像とは何か毎回悩みながらの選考だが、知識だけでなくどうやって人に寄り添っていくかを若い医師が考えられる素晴らしい賞として継続していくことを願っている。

檀ふみ委員 事前に候補者を選考するときは、命に向かって仕事をしている先生に優秀はつけられないと悩んで徹夜になってしまった。大賞にならなかった先生も含め、皆さんが素晴らしい仕事をしている。世の中にこれだけの素晴らしい先生がいることを誇らしく思った。

ロバート・キャンベル委員 長い期間、地域住民に寄り添い、住民の健康管理に貢献した先生や、災害発生時の対応、難病の筋萎縮性側索硬化症(ALS)への取り組みなど、強い使命感を持つ先生を高く評価しました。

河合雅司委員 今回は女性の推薦が多く、世の流れを感じた。地方を歩いていると、医師は地域そのものだと思う。医師がいなくなると人は住めない。それが危うくなっているこの国で、大賞に選ばれた先生たちには地域医療の太陽になっていただきたい。

吉田学委員 多くの先生が医療を通じて日々地域と向き合い、支えていることが伝わってきた。在宅看取りやたび重なる災害など取り組むべき課題が多くある中、健康を中心に地域住民の生活を支えるかかりつけ機能の重要性を再認識した。この賞が、若い医師が地域医療を考えるきっかけになればと思う。

鳥取県中部に位置する三朝町。高齢化率も高く、冬に積雪も多いこの地にある診療所で、約20年にわたって治療に情熱を注いできた。「血圧を測りますね」「深呼吸してリラックス」。患者に優しく声をかけ、雑談を交えながらゆっくり時間をかけて診察する。83歳となった現在でも、ほぼ毎日、次々に訪れる外来の患者を診察する。町の医療の要で、交通の便がよくない地域から来院する患者の負担軽減となつていく。「やさしい丁寧な教え方」と患者からの信頼も厚い。午前と午後、診察の間に自ら車を運転して看護師と往診先へ向かうこともある。患者は高齢者がほとんど。がん末期の患者が自宅での看取りを希望することも多く、看取り診療も行っている。

患者の声に耳傾け きめ細かい愛情

診療する際に心がけているのは患者の声にしっかりと耳を傾けること。大学卒業後、診療所を営む親族が急死し、開業することになった経験が原動力。「まだ経験がなかった分、患者さ

少子高齢化で、地方の医療環境は厳しさを増している。「健康に気を配りながらこれからも頑張る仕事を続けたい」。その力を込めた。(坂田弘幸)

当時のまだ女性の医師は珍しく、患者から「今日はオナゴか?」と心ない言葉をかけてられたこともあった。「まだそういう社会」と心に言い聞かせ、患者にきめ細かい愛情を注いだ。平成11年に現在の医院で再び開業。「今は一人一人の患者にたっぷり時間をとれること誇りに思っています」。

町役場やJA共済などの依頼で健康講話の講師も務める。聴講者に高齢者が多いため、語尾をはっきりと話すよう心がける。患者の視線に立った姿勢は常に温かい。

湯川喜美氏 (鳥取県三朝町)



診療する湯川喜美医師(鳥取県三朝町(山田哲司撮影))

ゆかわ・きみ 湯川医院院長。昭和11年、鳥取県三朝町生まれ。83歳。鳥取大学医学部を卒業後、親族が急逝したため倉吉市で診療所を開業。同市の県立厚生病院の勤務を経て、平成11年に三朝町で再び開業医になった。健康講話の講師も務め、地域医療の最前線で活動している。

積舎龍三氏 (広島県大崎上島町)



診察する積舎龍三医師(広島県大崎上島町(寺口純平撮影))

ときや・りゅうぞう ときや内科理事長。昭和33年、広島県大崎上島町生まれ。61歳。川崎医科大学大学院を修了し、同大付属川崎病院に勤務。平成3年から地元に戻り、父・龍夫氏を支え、8年にときや内科の院長を引き継いだ。

「24時間、365日いつでも診察する」のが信条でやってきました。高齢化率48%の島民たちのかかりつけ医として重要なことは、早期発見、早期治療。CTスキャンや内視鏡、胃カメラなど最先端の

「健康な世代交代が理想。無責任な形でやめるわけにはいきません」と語り、後継者探しを進めている。「特別に変わったこととしてはいないのに、なぜ選ばれたのか」と赤ひげ大賞受賞に戸惑いの表情をみせていた。(格清政典)

信条は「24時間、365日いつでも診療」

「健康な世代交代が理想。無責任な形でやめるわけにはいきません」と語り、後継者探しを進めている。「特別に変わったこととしてはいないのに、なぜ選ばれたのか」と赤ひげ大賞受賞に戸惑いの表情をみせていた。(格清政典)

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

古江増蔵氏 (鹿児島県霧島市)



電動カートで巡回する古江増蔵医師(鹿児島県霧島市(中村雅和撮影))

ふるえ・ますぞう 医療法人・社会福祉法人桃源会理事長。大正10年、鹿児島県霧島市生まれ。98歳。千葉医科大学(現千葉大学医学部)卒業後、国立千葉病院、国立療養所霧島病院(鹿児島県)などを経て、昭和24年、鹿児島県霧島市(現霧島市)に古江医院を開業。50年に身体障害者療養施設、霧島青葉園を開設し、その後も特別養護老人ホームや在宅介護支援センター、介護老人保健施設などを次々に開設。現在も、現役の施設長として障害者・高齢者の診療や支援に注力する。

キャリア70年超 あくなき向上心

「歩むての回診、カーブとまっすぐな反応が違ふ。座って入所者と同じ目線になったことで壁がなくなったんだらう。そんな新しい発見はうれしー」と笑顔を見せ、さらに続けた。「引退はない。職員と患者の顔をみるのが楽しみだから。生涯現役です」(中村雅和)

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

「先生、こんにちは」「はい、こんにちは。何か体が変わったことはないですか?」

太陽生命は、お客さまに安心をお届けしてまいります。

お支払い手続きその場でサポート!

かけつけ隊

におまかせください。

太陽生命が一番大切にしている、保険金・給付金のお支払い。専門知識を有する内務員が、お支払い手続きに不安をもたれているお客さまのもとへ直接かけつけ、その場で手続きをサポート。いち早く安心をお届けします。お客さまの笑顔のために、太陽の「かけつけ隊」におまかせください!

